所管事務調査報告

総務常任委員会

生活・産業廃棄物等の排水処理

調査地・宮崎県川南町

調査日・平成15年7月8日

宮崎県児湯郡川南町の「生活、産業廃棄物等の排水処理に関する調査」について所管事務調査を実施しました。その調査の概要及び結果は次のとおりであります。

川南町有機物堆肥化センターの処理施設概要は、川南町の町有地、約2万5000㎡を鹿児島市の「株式会社山有」が借り上げて建設し、平成14年10月から運営しているものである。

施設全体の計画は、株式会社山有が独自の百度前後の高温で発酵する好気性微生物「YM菌」を使った処理技術で堆肥化処理を進めるもので、畜産ふん尿からスタートし、家畜の死骸、人の排泄物、食肉処理場から出る血液、果汁工場の絞りかすなど、町内のあらゆる生活、産業排水を1カ所で処理する施設とのことであったが、現在は、「畜ふん」のみで稼動されている。施設の規模は、30㎡の発酵槽34基が入った鉄骨造平屋建4704㎡、管理棟が鉄骨造2階建314㎡で、処理能力は、今回の1期工事で「畜ふん1日100トン」であるが、最終的には「1日200トン」が見込まれている。さらに、同規模の発酵槽の建物を1棟建設予定とのことである。

発酵槽内で、処理体系の説明を受ける各委員

施設の堆肥化の特徴としては、①超高温好熱性発酵で完熟している。②摂氏95～105度の高温ゾーンで発酵するため、草種子雑菌のない良質の肥料である。③約50日で完熟の肥料に仕上げられる。④良質肥料の生産コストが安価である、などが上げられています。

調査の結果、川南町は畜産業が盛んな町で農業粗生産額の3分の2を占め、家畜ふん尿の処理とともに、生活、産業廃棄物等の排水の一括処理体制は長年の課題であったとのことで、こうしたことから、同施設の立地を進め、町内のあらゆる生活、産業排水を1カ所で処理する施設を目指されている。しかしながら、現在は、「畜ふん」のみで稼動されているだけで、生活雑排水等の一括処理までは至っていない状況であった。

川南町の取組みは、現時点で一括処理の体制がとられていないものの、同施設の立地に伴う計画性は評価できるものと考えられる。本町も、畜産業や生活環境の保全等の面から類似する点を考えれば、川南町の今後の取組み、施設の本稼動の推移を見守りながら、農村社会における生産・経済活動と住環境の共存のために参考にする必要がある。

経済建設常任委員会

米の品質向上対策

調査地・佐賀県相知町

調査日・平成15年7月9日

売れる米、うまい米作りを更に推進する必要があるため、本町と地形的にも類似し、低たんぱく米への取り組みを実施している佐賀県東松浦農協で所管事務調査を実施しました。その調査の概要及び結果は次のとおりであります。

説明員として組合長、農産係長、県普及センター農畜産係長の出席のもと関係資料に基づき説明を受けました。

カントリーエベレーターの稼動状況等の説明を受ける各委員

①標高50～650mまでの中山間地にあり、5月10日から6月24日までに田植えを終了し、80%がヒノヒカリである。②カントリーエレベータを核とし、管内作付面積577ha中、利用面積346・2haである。③平成11年稼動し、処理能力400ha、2800トンである。④平成11年から佐賀県において食味コンクールが開催されたことにより、低たんぱく米への取組みを実施。⑤平成13年は良質米を選び、平成14年度は悪いものを排除という形態。⑥栽培方法は独自の葉色カラースケールにより指導、肥料は従来通りで主に水管理を徹底指導、移植基本として株間18㎝、植付本数5本以下、箱数20箱以下である。⑦販路はJA中心としている。低たんぱく米と極低たんぱく米に分かれ、水分14・5%でタンパク含有量5・5%以下を極低たんぱく米とし、60kg当たり1500円の価格プラスを実施。⑧行政とのタイアップとして200万円を県、町2分の1ずつ販路等に向けて助成している。町単事業として価格保障に助成している。⑨平成15年からマスタープラン等を作り販路の更なる改革、戦略を実施している。

佐賀県においては常に危機感を持ち、前向きに取組まれていた。今後JAさつまにおいて食味計を導入されると聞いている。本町においても良質米の生産、売れる米作り、うまい米作りを更に推進していくために、JA、関係機関との密接な連携を図っていかれたい。

ドラゴンボート大会で奮闘

8月24日行われた第6回水辺の楽校鶴田龍舟祭（ドラゴンボート大会）で、議会チームは、町内の部の出場数44チームの中から予選を順調に勝ち抜き、町内の部で5位に入賞するなど大奮闘しました。

ちなみにタイムは、優勝チーム1分33秒78、議会チーム1分47秒83でした。

町内の部の決勝戦に向かう議会チーム